

講演会報告

「ミツバチはなぜ消える！～新農薬ネオニコチノイドの危険性～」



運営委員 小椋 和子

11月20日、博多パークホテルで表記講演が行われた。講演はグリーンコープ生協ふくおか副理事長の小松実加氏の開会の挨拶で開始された。

はじめに、「生態系と農業」について立川代表理事の講演があった。

福岡ではかつて塩素系農薬のBHCが最も多く使用された。今は新しいネオニコチノイドがそれに変わった可能性がある。BHCはすでに使用禁止であるが、ネオニコチノイドも同様の措置が早急に行われることが望まれる。

次の講演はみつばちたすけ隊の久志富士男氏による「ネオニコチノイド農薬による昆虫と鳥類の消滅」である。10月に名古屋で開催されたCOP10にはみつばちたすけ隊がブースを開き、ミツバチの大量死を訴えた。COP10では名古屋議定書が議決されたが、これに加え、生物多様性を保全するために2010年以降の国際目標「愛知ターゲット」が採択されたことが紹介された。氏によると長崎県ではすでに多くの被害が発生していることが明らかになっているにもかかわらず、2009年にネオニコチノイド系が推奨され、生物多様性が破壊されたことが紹介された。

3番目の講演は、東京都神経科学総合研究所の黒田洋一郎氏による「環境化学物質と子どもの脳の発達障害—ネオニコチノイド・有機リン農薬の危険性—」である。

有機リンは脳の神経伝達物質アセチルコリンを分解する酵素を阻害する。したがって信号が伝達された後もON状態になり、アセチルコリンが蓄積され

毒性を発揮する。それに対してヒト脳内のニコチン性アセチルコリン受容体は脳内に広く存在しているが、その役割は長らく不明であった。近年になり記憶・学習・認知など高次機能に関与し、さらに抗不安作用や鎮痛効果など多様な性質を持つことが分かってきた。ネオニコチノイドはこの受容体に結合し、アセチルコリンがなくても神経伝達のスイッチがONになる。農薬のネオニコチノイドならびに有機リンはこのように神経回路を傷害する。種を選ばず、すべての生物の神経回路を破壊するこのような農薬の使用は、人間に対しても同様な影響を与えることを学ばなくてはならない。とくに脳関門が発達していない子どもへの影響が心配される。

4番目の講演は国民会議理事の水野玲子氏による「新農薬ネオニコチノイドのヒトと生態系への影響—海外の取り組みに学ぶ—」である。

1990年初めからヨーロッパ諸国でミツバチ大量失踪が報告され、アメリカでは2006年10月には4分の1のハチが消えた。日本でも2009年6月には21都県でミツバチ不足が報告された。ネオニコチノイド系農薬がその原因として最有力にもかかわらず、多くの原因が取りざたされている。国際獣疫事務局(OIE)は2010年に原因は複合的と発表した。

日本では諸外国に比べて食品への残留基準が高い。アセタミプリドの残留基準はEUにくらべて、茶葉、イチゴ、ブドウ、キャベツ、ブロッコリーで500倍の濃度である。ネオニコチノイド系は農産物のみならず、建築材、ガーデニングに使用されているので、消費者は使用の際には十分に調査をしなければならない。ネオニコチノイド系のみならずフィプロニル(フェニルピラゾール系の浸透性農薬)にも注意が必要であることが指摘された。